

## ⑱ 木下家御領内日蓮宗不受不施派顛末控

下は、平成28年度蛍明小学校6年生の大井神社に関する歴史探検レポートの一部です。皆様は、この中に出る「不受不施」の意味をご存じでしょうか。これは、「日蓮宗以外の者からの布施・供養は受けないし、供養もしない。」という日蓮宗本来の教えです。

しかし、この日蓮宗伝統の不受不施の教えは、教団の内部分裂により江戸時代を通じて禁止されたのです。ではどのような経緯があつて分裂したのでしょうか。

話しは、文禄4年（1595）9月に遡ります。この年、豊臣秀吉は、京都東山妙法院大仏供養会を行うため、洛中各寺へ僧侶の出仕を命じます。

このとき、日蓮宗の寺々では、かつて足利將軍家主催の供養会には、不受不施をタテに出仕を断つたのですが、時の権力者秀吉の威光には逆らえず、これを受け入れることになりました。

しかし、妙覚寺の日奥は、「秀吉は信者ではなく、その上、謗法者（仏を軽んじる者）だ。宗祖日蓮の教えを例え一度でも破れば永代宗義を守ることが出来ない。」と出仕を拒み、妙覚寺を退去しました。これが後の「不受不施と受布施（身延派）」の分かれ目となったのです。

（松田氏の時代は分裂前ですから日蓮宗は即ち不受不施です。松田氏は、大井神社を取り仕切っていた僧侶に日蓮宗への転向を迫ったということでしょう。指示に逆らった備前の吉備津彦神社は焼き討ちに遭いました。）

以降、二派の内部抗争は徳川幕府までも介入するところとなります。結果、封建制度の下において、將軍・大名からの供養を否定する不受不施派が禁教になるのは必然的な結果でした。

寛文5年（1665）、幕府は「飲水、行路も供養として拝受する。」との手形（誓約書）の提出を迫り、不受不施の存在を不能に陥らせます。

寛文6年、岡山藩は、手形を出さぬ不受不施の寺313ヶ寺を破却し、僧585人を追放あるいは投獄。寛文9年には、和氣郡佐伯町矢田部（現和氣町矢田部）の不受不施信徒6人を斬首、その一族28人を追放しました。このような厳しい処断は、備中国大井郷まで影響を及ぼしたのでしょうか。

粟井佐古の如意山法昌寺の詠田住職のお話しでは、昔は不受不施だったが、今は、法華宗ですと言われます。聞きますと、日蓮が広めたものが日蓮宗。日蓮の弟子日隆が広めたものが法華宗だそうです。納得…でもどんな訳があつて弟子の方へ転向したのでしょうか？



粟井佐古の如意山法昌寺

果たして、同寺の記録には、「天正年中長門右衛門尉日蓮宗帰依ニ付岡山蓮昌寺ヨリ蓮如院日相上人ヲ迎エ開基トス … 元本寺ハ仏住山蓮昌寺ナリ 然ル所寛文七丁未年御両山末に相成…とあります。御両山とは、京都本能寺、尼崎本

大井神社の歴史

地域の誇り

大井神社

再建したという。

正元元年 創立  
祭神 百田大元命  
(百田大元命の父)  
百田大元命  
(大井大元命の父)  
津彦命の妃  
心神天皇  
神功皇后  
伊弉諾命  
が祀られている。  
ご神体は鏡である  
明治甲午年失火全焼

永祿九年  
一五六六  
金川城主松田権  
南か不受不施の幡大  
菩薩の仏体を奉祀  
せよと強要官は  
これに反抗し自刃、故  
神仏混合となる。

蛍明小学校歴史探検レポート

令和元年09月16日 つるつる会

興寺のことです。また、河原の妙本寺の過去帳には、「開祖荒木伊賀頭ト申者 … 寛文五巳年不受不施停止ノ際同年四月組寺総代東光寺、新福寺両寺現住上京シテ能興両山の末流トナル…」とあります。

このように、大井郷の日蓮宗の寺は、寛文年中までは松田氏開基の蓮昌寺（本山は京都妙覚寺）の末寺、即ち不受不施だったのです。このことを、岡山大学刊「陣屋町の研究」の著者赤柏宏は、他国に禁庄にめげず不受不施を貫いたものがある例に鑑み、安易な退転は住職の頹廃を物語ると厳しく断じています。

さて、赤柏先生の憤慨はともかく、不受不施派には生きることさえ難しい寛文2年（1662）8月、幕府から足守藩第5代藩主利貞公へ不受布施僧がお預けとなりました。

下総国正中山法華経寺（千葉県市川市）の僧で、同寺の内紛により受布施派により寺社奉行へ訴えられ罪人となった正法院日継です。流刑者、日継への木下家の対応はどのようなものであったのか。足守藩お預けから遷化（死没）までの出来事を並べて見ますと意外な事実気付かされます。



- ・先ず、寛文2年（1662）8月、足守藩お預け。41歳
  - ・寛文4年（1664）4月、福崎村に驚林庵を開き備前・備中の老若男女を教化。
  - ・延宝3年（1675）6月、墓塔（2.5mを超える大無縫塔）を建立。
  - ・延宝7年（1679）8月、木下公定が第6代藩主となる。
  - ・天和2年（1682）5月、公定公へ引き続きお預け。
  - ・貞享4年（1687）7月、驚林庵にて遷化。66歳
- ポイントは、驚林庵を開き、備前・備中の庶民を教化したこと及び生存中の巨大墓塔の建立でしょう。どちらも一流刑者のなし得ることではありません。では、何故出来たのか？

その答えを探る前に、不受不施信徒が200年に及ぶ弾圧に耐えた原動力は何であったのか考えてみましょう。それは多くの例から、道徳的・犠牲的精神溢れる指導僧の存在と、不受不施義に賛同する権力者の援助の二つと分かっています。

指導僧は、布教活動のみ行った訳ではありません。飢饉に苦しむ農民の為に郷蔵をつくり、時に人柱になるという行為は信徒に感動と勇気を与えたことでしょう。また、権力者の中には、そうした指導僧の生き方に共鳴し、隠れて念仏を唱える者のために隠れ家や食べ物を提供する者がいました。彼等もまた役人に見つかれば厳しく罰せられるのですが、そうした危険の中でも僧侶や信者達を守り続けたのです。

この二つの要因を日継に重ねてみましょう。先ず、指導僧とは日継自身。では、権力者とは誰であったのでしょうか。それは、日継を身近に感じる人物に違いありません。木下家は殊のほか寺院の保護に熱心でした。権力者とはつまり、藩主利貞公その人ではないのでしょうか…。

藩最高権力者の理解があればこそ、福崎村に庵を結び庶民を教導し、藩主の墓を凌ぐかの大墓塔を建立、66歳の天命を全うできたのではないのでしょうか。

なお、驚林庵は令和元年6月27日、355年の歴史に幕を閉じました。南無妙法蓮華経

